第八回世界俳句協会大会開催報告

渡邉　しゅういち

マロニエの戦ぎのなか、９月４日から６日までお茶の水の明治大学リバティーホールで、第八回世界俳句協会の大会が開催された。今回のテーマは「無限の対話」。俳句をプラットホームとしてあらゆる言語、あらゆる文化、あらゆる芸術との対話を試みるという画期的な取り組み。これに先立ち、同タワー内のギャラリーでは「世界の俳句」展を開催。俳句に関する世界の書籍約２０点、および今大会に参加する俳人の書などを展示した。

国内外１４か国から、約５０名の俳人や詩人が参加した今大会だが、４日の前夜祭には、そのほぼ全員が顔を見せ、大会の成功を予感させた。モンゴルとベトナムの仲間が、民族衣装で参加してくれたが、やはり美しい。それに国際的な集まりでは一目で母国が分かるのはありがたい。

司会は清水国治。夏石番矢代表の挨拶に続き、来賓挨拶。美術家の堀浩哉による乾杯の音頭でパーティーは一気に盛り上がった。その後、中村香奈子の龍笛と音無史哉の笙のよる雅楽の演奏、今大会の事務局スタッフとしても活躍した山田耕司の篠笛による祭り囃子も披露された。各国の人たちだけでなく、われわれ日本人にとっても貴重な体験であり、多くの人が映像に収めていた。恒例の俳句朗読は、モンゴルのウルジン・フレルバータルにより口火が切られた。

On the gazelle-striding steppe,
a flame swaying above an oasis
its a mirage

跳ね快速の羚羊の草原/オアシスに炎が揺らぐ/これぞ蜃気楼

その後、朗読のセッションは、大会中に六回開催されることとなる。夏石番矢の

未来より滝を吹き割る風来たる

を八言語に翻訳し、連読するパフォーマンスあたりでパーティーは最大の盛り上がりを迎えた。

大会初日となる５日（土）は朝から「世界俳句協会会議」が開催され、①２０１４年度会計報告、②世界俳句ＮＯ１１の出版報告、③次回第９回大会は、２０１７年９月にイタリアのパルマで開催、④ウルジン・フレルバータル（モンゴル）とボー・リラ（デンマーク）を協会の広報担当に加える。ことなどが承認された。

講演のトップバッターは詩人の小川静枝。テーマは「フランス語圏の俳句」。日本の小学校の国語教育における俳句をテーマとしたドキュメンタリー映像も披露された。

午後からは、今大会の華とも言える五人の女性俳人による女性俳句の考察。まず鎌倉佐弓は、「女性らしさを強調しなくても、自然体で作句すれば、おのずと女性らしくなる。また男女差は認め合うべき」と発言。これは彼女の作品で実践され、実現されていることでもある。長嶺千晶は、「女性俳句は女性の社会的背景に大きく左右されてきた。今後、女性の社会的立場が変わってくれば、多様な女性俳句が出てくる」と予想。さらに「性差ゆえの女性差別化が、まだ日本では存在しているが、男女差は認め合うことが大切。」とも結論付けている。梶原由紀は、近年の自由律女性俳句から、「女性らしさ」を切り口に分析。「男女間の身体的・文化的違いを認めたうえで、人間としての俳句があるべき。」と主張、若い世代のエネルギーを感じさせた。ポルトガルのズラトカ・ティメノヴァは、「女性によって書かれた俳句に男性的しるし、男性によって書かれた俳句に女性的しるし」など、日本の三俳人とは異なる角度からテーマを扱っており、社会的もしくは宗教的な背景の違いを意識させた。結論でない結論「俳句は、女たちの王国へちゃんと向かう」はユニーク。ベトナムのレー・ティビンは歴史の浅いベトナム俳句での、女性たちの活躍について報告してくれた。スピーチの後、会場から質問が続出。企画のすばらしさが裏付けられた。

３回目の朗読セッションのあと、梅若猶彦が能のパフォーマンスを交えながら、謡曲のコミと切れと韻律について講演。続いて東京大学名誉教授の平川祐弘による特別講演に入った。俳句がいかにしてＨＡＩＫＵになったか、その歴史を解説。さらに、教え子である夏石番矢の俳句をそのなかに位置づけた。高齢

にもかかわらず、講演は明晰かつウイットに富んでおり素晴らしい内容。「俳句はそのうち日本語と離れることでさらにグローバル化する。」という発言も印象的であった。
米国のジェイムス・シェイの「循環的な影響・俳句の翻訳」、上野一孝の「日本の古典俳句」につづき、世界の各地域における俳句事情の講演となった。モンゴル俳句は、ウルジン・フレルバータル。ベトナム俳句は、ディン・ニヤット・ハイン。アラビア圏の俳句は、モロッコのアブデルカデール・ジャムッスイ。デンマークの俳句は、ボー・リラ（大会２日目）が担当した。これらのなかで、共通して語られたのが、それぞれの言語の持つ特性や音楽性、また社会・伝統の特性と日本の伝統的俳句との親和性。現在はそれぞれの地域に合わせてシンクロナイズしており、五七五のスタイルやそのなかに自然を詠う精神だけを取り込むといった方式などが採用されている、このまま各地にそれぞれの進化を委ねてもよいが、俳句のプラットホーム化を目指す協会がコアとなる概念を示してゆくべきと感じた。歴史ある日本の俳句は、まだ世界に広がる新鮮さを有している。
山口政信がことわざのわざにつき講演、４回目の朗読セッションで長くて短い一日を終えた。
この大会に向けて、世界俳句協会俳句コンテストと「千代田区を詠む」句会が開催され、ともに第一回目の入賞者の表彰が大会二日目の９月６日（日）に行われた。前者はオープン型のコンテスト、後者は開催地の千代田区にちなんだもので、おもに若者を対象とした句会だ。コンテストの入賞者は七名、一位は同ポイントで二名が選出された。その作品を紹介する。

人危める白い指先スマートフォン

White fingertip
killng a man
a smart phone　　金城　けい

真夏日の夜空地球をもう一つ

The night sky
of a tropical day
add to it one more earth!　　野谷　真治

なお、金城けいの受賞記事は地元の沖縄タイムズでも掲載された。海外では、ポルトガルのレオニルダ・アルファロビーナ、トルコのジョセフ・サルバトーレ・アベルサーノが入賞をはたした。これらとは別に、世界俳句協会俳画コンテストが開催されているが、このことは清水国治が講演で触れた。
「千代田区を詠む」句会での表彰は十二名、大学生の小山大樹が最優秀賞に選出された。

坂の上文人たちの監獄

At the top
of a slop
a prison for writers　　小山　大樹

大会二日目の講演は、詩人の八木忠栄による「落語と俳句」、中国の徐一平と石倉秀樹の対談「中国語俳句の音楽性」へと続く。午後からは川名大により、長律句・連作・多行句といった昭和期の俳句改革の傾向が考察された。木村聡雄は「現代俳句の詩学・俳句精神を求めて」のなかで、今後の世界の現代俳句は「伝統性を含みつつ新たな詩世界を模索する、俳句精神を備えた短詩形」と定義した。講演はそねだ　ゆの「自由律俳句の音楽性」で終了。
あらゆる芸術との対話も、二日目の大きなテーマ。蒼浩人は俳句と創作舞踏とのコラボレーション。コヤマエイジは映像と俳句の作品イメージを同化した。また、中村香奈子の龍笛と夏石番矢の俳句朗読の競演も実現した。
開会中に大きなトラブルもなく、入場者も百六十人を超え、大会は成功裏に終了した。この流れを次回のパルマ大会に引き継ぎ、世界俳句協会のさらなる発展に繋げたい。お別れパーティーも盛り上がり、瞬く間に東京の夜は更けていった。